巻頭特集

強い心と身体、絆をつくる

草ヶ江ヤングラガーズクラブ

KUSAGAE YOUNG RUGGERS

One for All,All for One.
一人はみんなのために、
みんなは一人のために。

団体競技の中でも、特にチーム力が問われるラグビーを通して「子どもたちを育てたい」と考えた人がいました。約半世紀もの間、受け継がれてきた「草ヶ江ヤングラガーズ魂」。楕円球に込められた思いを追いました。

1

朝のグラウンドで

日曜日の朝8時30分。グラウンドに次々と車が到着し、まず子どもが、続いてトレーニングウェアを着たお父さんが降りてくる。送り迎えだけでなく、指導や運営に父親が関わること。それが『草ヶ江ヤングラガーズクラブ（以下、草ヶ江YRC）』のルール。

「指導にあたるのは、ラグビー経験者を中心としてスポーツ経験のある保護者です」と、事務局長の井上慶一さん。ラグビーは体格でプレイに差が出るスポーツ。そのため練習は、幼稚園児と小学生の各学年、中学生別に行われ、それぞれにチーフコーチとコーチ、運営担当の学年係が付く。20名の子どもたちを、10名前後の大人がサポートする手厚さだ。入部の時には面接があり、保護者の意思とやる気も問われると聞いた。

「ラグビーしかござっせん」。

草ヶ江YRCの設立は1970年。創設者・橋本新八郎さんが、「子どもを育てるにはどうしたらよかろうか」と尋ねた時に、後輩で友人の守田基定さんは「ラグビーしかござっせん」と答える。時代は、高度成長期。宅地化が進み、子どもの遊び場である空き地が減少する中で、体力低下や地域での上下関係がなくなり、ひ弱になっていく子どもたちに、橋本さんは危機感を募らせた。21世紀の人づくりをしなければ。その思いが少年ラグビーチーム設立へと駆り立てる。

身体と身体を激しくぶつけることから、〝ルールのある格闘技〟ともいわれるラグビー。「何もそんな危ないことをさせなくても」と、反対の声も多かった。九州ラグビー協会をはじめ、修猷館や城南高校の監督の協力はとりつけたが、主役の子どもが集まらない。学校やPTAなどあらゆる手を尽くして説明にまわった。なんとか草ヶ江公民館の主事の理解を得て、草ヶ江小学校の校庭に、体操服と運動靴姿のちびっ子17名が集まってきたのが、1970年6月。構想から2年が経っていた。

極寒の中での新人研修

挨拶をする。時間を守る。力を入れたのは、人としての教育。それを徹底的に叩き込まれるのが、毎年1月から3月まで行われる新人研修だ。前年に入部した人が対象で、メニューはランニングや階段の上り下り、柔軟体操。ボールは、切使わない。研修後にはバッジテストがあり、それに合格して初めて、背番号が付いた草ヶ江ジャージが手渡される。

「小雪が舞う中、体操服一枚で寒かった」「日曜日がユウウツだった」。10年ごとに制作している記念誌には、辛かったけど楽しかった研修の思い出が数多く綴られているが、この3カ月を経ると子どもたちは目に見えてたくましくなる。しかし研修は、単に根性論から生まれたものではない。井上さんは「当時の指導者たちは経験的に、ケガをしないためには柔軟性や基礎的な運動能力が大事だと知っていたのでしょう」と、スポーツ科学としての意義を説明する。

研修は保護者の参加も必須。一生懸命がんばる子どもたちを見て、感動する気持ちが、保護者をひとつにしていくという。

こうした厳しさを、当時の社会は求めていたのだろう。5年後には部員は200名に、その後300名まで増えていく。

子どもたちに本物を見せたい

人づくりに軸足を置く一方で、橋本さんはじめ指導者たちは、勝てるチームづくりにも邁進する。

少年ラグビーのレベルが高い大阪で練習試合を組み、花園で行われる全国高校ラグビー選手権大会を観戦する遠征を

5

6

8

7

1・2／福岡も開催都市の一つになっている、2019年のラグビーワールドカップ。本物のプレイを間近で見ることは、子どもたちの夢と技術を飛躍させるにちがいない　3／事務局長の井上慶一さん（左）と、副会長の関宗久さん。子どもたちが同じ学年に所属している、保護者同級生だ　4／初代会長の橋本新八郎さんと、夫人で二代目会長の美代さん。創立から5年間はジャージやストッキング、ボールまでをポケットマネーでまかなった　5・6／大阪遠征や海外交流などクラブチームにとらわれない活動が、子どもたちの貴重な経験の場に　7・8／毎年1月から3月に行われる新人研修は、ラグビーをするための強い心と柔軟な身体を養っている

2

4

3

9

10

9／特別功労者制度があり、クラブ運営に尽力した人には赤ジャージが贈られる。前から2列目、左端が現会長の片渕善裕さん　10／4年生の母親、6年生の父親が、子どもたちと真剣勝負を繰り広げる保護者試合。試合が成り立つギリギリの年齢で、毎年大いに盛り上がる

スタート。さらに10周年記念事業としてオーストラリア・ニュージーランド（NZ）へのツアーを計画した。個人の海外旅行が一般的ではなかった時代、1つのクラブチームが海外に行くなど「無謀だ」と強固な反対もあった。しかし、設立の時と同じ熱意でこれを実現。子どもと保護者、約200人で海を渡った。

福岡市がオークランド市（NZ）と姉妹都市になったのも、この遠征がきっかけだといわれている。5年後にはNZのワイテマタラグビークラブが来福、チーム間の交流は今も続いている。

大阪での練習試合は初め、「得点を記録に残さない」ほど実力に開きがあった。しかし、本場のラグビーに接した子どもたちの成長は、著しかった。九州大会優勝など輝かしい成績を残すようになり、日本人初のプロラガーマン・村田亙（わたる）選手をはじめ、日本代表や大学リーグで活躍する選手を数多く輩出。草ケ江YRCは実力を兼ね備えた名クラブへと成長する。その陰には、橋本初代会長のあっと驚くような発想があった。

ラグビーを通した人づくり

前回のワールドカップで、南アフリカに逆転勝ちした全日本メンバーの3人が福岡県出身であることでもわかるように、福岡は「ラグビー王国・九州」の一翼を担っている。22のクラブ数は、大阪の33に次いで多い。強さや勝つことだけを求め、チーム間を移動する人もいるそうだが、草ケ江YRCに限っては「退部はほとんどなく、そういう子の受け入れは一切しない」と、副会長の関宗久さんは胸を張る。

その理由を会長の片渕善裕さんは「ラグビーを通した人づくりという、信念があるから」と話す。「草ケ江YRCでは、〝親が一番勉強になる〟んです。私も子どもの接し方をずいぶん教わりました。子どもたちとも保護者とも、同じ釜の飯を食ったという仲間意識が生まれる。長男や次男と今でも話ができるのは、ラグビーという共通の話題があるからです」。

練習の後、印象的な場面を見た。腕の中で泣いている子に、一生懸命話しかけるコーチと、その言葉にうなずく子ども。まるで親子のようだった。

「悪いことをしたら叱る。逆に、良い行いや一生懸命な姿は褒める。自分の子もよその子にも、同じ態度で接します。他のお父さんに褒められるのもうれしいみたいです」。見学に来ていたお母さんたちも口を揃える。

自らを犠牲にしてでも、ボールを生かす。1つのトライは、チーム全員の献身から生まれるのだそうだ。本当に大切なものは表に出ないが、見えないところでこそ、がんばれ。それが草ケ江ヤングラガーズ魂。それでも努力やがんばりを認めてくれる人が、草ケ江YRCにはちゃんといる。二つの大きな家族のように、子どもたちを見守り、育む。

半世紀にわたってさまざまな人がつないできた楕円球は、今の世代にもしっかりと受け継がれている。

親も子も、草ケ江YRC育ちです!

徳本裕哉さん・琉馬くん（小3）

「低学年までは、毎週辞めたいと思っていました」と笑う徳本裕哉さんは、現在4年生のコーチ。クラブ在籍時は、小学校、中学校チームで九州大会優勝を果たしました。父親になって改めて"強い子どもを育てる"という草ケ江YRCの信念に共感していると話します。「ラグビー選手になりたい」と、目を輝かせる琉馬くんの夢を、父として先輩として応援しています。

強い心と身体、絆をつくる

草ケ江ヤングラガーズクラブ

KUSAGAE YOUNG RUGGERS

NPO法人 草ケ江ヤングラガーズクラブ

保護者やOBのボランティアに支えられたNPO法人（特定非営利活動法人）。1970年創立は、福岡県内で現存する少年ラグビークラブでは一番長い歴史を誇る。「コーチは、自分の子どもの学年チームを担当しない」「親子で参加する新人研修」といったユニークな運営は、実績と経験から確立されたもの。入部は随時受け付け。見学や体験も歓迎!

［対象年齢］年長児から中学生＊年中児は要相談
［練 習 日］日曜日9時～12時＊中学生は土曜日練習あり
［入 会 金］5,000円
［年 会 費］20,000円※保険代含む
詳しくはHP参照 http://kusagae.or.jp/
問 info@kusagae.or.jp